

ペルーの世界遺産紀行に参加して

RSK—OB 亀山寿志

去る3月25日から4月3日までペルーに行って来ました。ペルーといえば今最も人気のある世界遺産マチュピチュやクスコ、チチカカ湖、それにナスカの地上絵等があるところです。さる3月には岡山でもデジタルミュージアムで「インカ、マヤ、アステカ展」が2ヶ月に渡って開催され、人々の人気を集めたばかりです。



だが行きたいという願望があっても、私の年齢から見て高地に広がるかの国で高山病に耐え、我が体力が正常にキープ出来るのだろうかとの疑問があり、決心するまで暫く逡巡がありました。だがもし行くならまだ体力のある今年が最後のチャンスと踏み切る事にしたわけです。家内は同行しないので、2~3友人知人を誘いましたが、何方からも断られました。結局、一人参加で旅行会社に申し込むと、総勢21名で一人参加は私のみ。他は全てカップルです。しかも70歳代は私のみで勿論最高齢者。他は若い方々ばかりです。

関西空港からリマ（ペルー首都）まで乗り継ぎ含めて28時間。飛行機だけでも20時間以上乗りました。リマからクスコを經由してマチュピチュ、そしてクスコに帰り、さらにチチカカ湖のあるプーノまでバスとペルーレイルと呼ばれる汽車で移動しました。

マチュピチュは高地にありますが高さほど高いところではありません。標高2400mほど。高地に慣れるよう最初から標高の高いところには行きません。しかし空中都市と呼ばれるだけあって、かつてペルーがスペインに滅ぼされたときには見つからなかった都市です。高山に身体を慣らすよう麓のアグアスカリエンテスに一泊しました。だがここで最初の高山病の被害者が出ました。女性で、頭痛と嘔吐、動悸に悩まされてホテルで寝込んでしまったのです。一晩に医者が三度も往診してくれたとかで次第に良くなったようですが、翌日のマチュピチュ登山はホテルに居残りとなったようです。



マチュピチュに上がるには徒歩で登山することが必要かと思いましたが、今はバスで殆ど入口まで行くことが出来ます。あの幻想的な空中都市とその先にあるワイナピチュの様子を目の当たりにすると、さすがに来て良かったという気持ちがわいてきます。しかし緑に坂を登る事もないのですが、息詰まる感触は避けようもありません。普段の速度を極力抑え緩慢な動きと水の補給に心掛けました。



マチュピチュの次はいよいよ高地に向いクスコに行きました。クスコはインカ帝国時代の首都だったところです。海拔3350m。移動の為に乗ったペルーレイルから下車すると既に酸素気圧の薄さを感じ、気分はよくありません。出来るだけのろろと歩きバスまで到達すると、大きく深呼吸します。

街は日干し煉瓦の赤屋根で全体が赤い街です。かつての首都は、インカ特有の「剃刀の刃も通さない」という石組みが所々にあり、その上にはスペインが建てた教会が残っています。カテドラルやサントドミンゴ教会、あるいはかつての要塞サクサイワマンなど多くの遺跡が残っています。



翌日はバスでさらに高地を走り、海拔4335mの地点ラ・ラヤで休憩し、チチカカ湖のあるプーノに向いました。この辺りに来ると我々のグループも6人ほどが

高山病の症状を呈し、青い顔をして緑にモノもいません。あれだけ各自で用心し体力温存を心掛けていますが、確かに頭痛が続き気分が悪くなります。私は幸い食欲の減退がなかったので大した事はなかったのですが、平地では考えられないような状況が起こります。少しでも坂があると、そちらに向うことは敬遠したくなるから不思議です。プーノのホテルはチチカカ湖のすぐそばにあり、我がルームは2階だったのですが、1階上に上がる階段さえ昇る気がしないのです。毎日5キロ以上歩いて鍛錬している私が何故？と我ながら呆れてしまうほどです。添乗員は唯の2階でも無理せずにエレベーターを使うようにと全員に指示をしていました。



チチカカ湖はアンデス山脈のほぼ中央、**海拔 3890m**の地点にあり、面積は琵琶湖のほぼ12倍という大きな湖です。湖の中段がペルーとボリビアの国境になっており、汽船の通る湖としては世界で最も高地にある湖です。

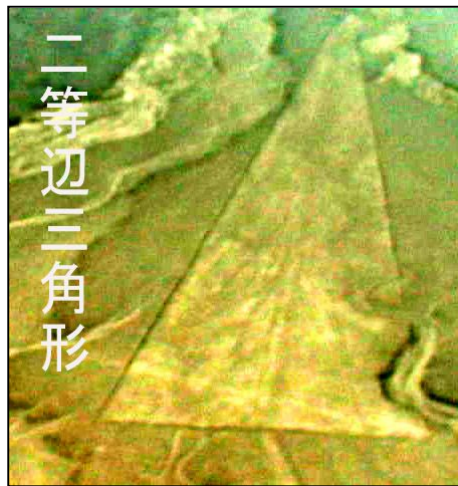
そのチチカカ湖にトトロと呼ばれる葦が多く群生しており、この葦を束ねて島が作られています。大小あわせて40ぐらい。この人工の島を**ウロス島**と呼びます。島には700人ほどの住民が住んでおり、小学校もあります。我々はモーター



ボートでこの島に渡ったのですが、船から下りると島自体がふわふわして足が沈み、これが島？とビックリします。小学校では数名の小学生が日本の童謡を歌って歓迎してくれました。

高地の観光が終わるとペルーの西海岸に位置する**イカ**という市まで移動しました。**ナスカの地上絵**を見るためです。飛行機とバスを乗り継ぎ、パンアメリカン・ハイウェイを真っ直ぐ走り、ようやく行き着いた**ナスカ**は乾燥した台地で**標高 620m**。廻りは将に砂漠で見渡すかぎりの荒野です。しかし平地に下りると、高地で味わったあの息苦しさや過酷さがまるで嘘のように消えます。

ナスカの地上絵は6世紀ごろまでに地面に刻み込まれた動植物の絵や線です。何の為に画かれたものかは未だに不明だそうです。日本では**地上絵**と呼ばれますが現地では**線**と称しています。つまり**ナスカラインズ**なのです。この模様を見るために3人又は5人乗りの小型セスナ機に分乗して上空から見るわけですが、私は半端人数なのでグループとは別行動。オーストラリア人カップルと3人のりに搭乗しました。そして小型機はいとも簡単に舞い上がったのですが、地上絵を見るべく両翼が何度も上下に旋回し、僅か30分の搭乗なのに相棒の女性が酔って嘔吐しました。それに肝腎のラインが誠に見難く、紛らわしい線が無数にあるのでパイロットが示すラインがしばしば見つかりません。ましてビデオのレンズを通して見ようと試みるのでますます見難く、見落とす場合が何度もありました。画かれた線は黒い地面の小石を浅く取り除いて白い地肌を露出させただけのものなので、国が余程保存に力を入れなにかぎり遠からず消え行く運命にあるものでしょう。十分見る事の出来なかったこのフライトは何か食い足りない満足感の持てないものでした。



ところで帰国後、CNNニュースを見ていたら4月9日にナスカの5人乗り機が墜落し、同乗のフランス人客全員死亡のニュースがありました。我々が同機に搭乗した日は4月1日。その事故がもし8日早く起って我々のグループだったら・・・と思わず冷や汗を感じたものです。

僅か8日間のペルー滞在でしたが素晴らしい経験が出来たと思っています。だが誰かにもう一度行きますかと問われたら、多分NOと答えるでしょう。

以上



2008/4

Mink-Okayama HP